我が終戦までの軌跡

土屋　博（前原西・72歳）

昭和十七年五月一日、私は再び生きては帰れないと思っていた故郷の土を踏んだ。

満州ハイラル（現在の中国東北部）の国境守備隊勤務の三年二か月であったが、日本軍が初めて惨めな敗戦を味わったノモンハン事件を体験し、戦争の悲惨さを嫌という程身につけての帰還であった。当時、静岡県賀茂郡竹麻村（現在、南伊豆町）は半農半漁で、昭和十二年から続いている日中戦争で若い男は殆んど狩り出され、農業、漁業とも兵役に関係ない老人や婦人、少年達の手で行なわれていた。

私の帰還した次の日、村役場の中に事務所のある農会（後に農業会と合併し、農業協同組合となる）の会長の訪問を受けた。「帰還されたばかりで申し訳ないが、食料増産の指導的役割を担う農会に、人材が無くて困っているので、是非入って欲しい。」との話、私は除隊の際「満期除隊と思うな。ちょっとした休暇で帰ったと思え。お前達の中には二十四時間以内に召集される者もいる。日本は今、人的資源が欠乏しているから、帰ったらすぐお嫁さんを貰い、子供をこしらえてこい。」と言われた部隊長の訓辞が頭にこびりついていたので、固く辞退したが、「召集令状が来るまでも良いから。」と言われ、遂に承諾してしまった。

後で知った事であったが、村で必要な農業要員ということで、連隊区司令部に私の召集延期願が出されていたことを。一緒に帰還した人達が次々と召集されていく中に、私は、申し訳ない様な気持ちに責められながら、今日か、明日かと来ることのない赤紙を待ち続けた。

農会に入った私の仕事は、当時の国策にそい、食糧増産の指導であった。すべて県農業会の指示に基づき、奨励品種の種子の配分、肥料の配分、農作業の改善等である。肥培管理の技術的な面は、県から派遣された技手の指導を受けるのである。勤務は一応、役場職員と同じということになっていたが、私の場合、到底その様な規則に当てはまるものではなかった。肥料や種子の配分にしても、日を決めて各部落に出張し、厳重な監督の下に行なう必要があり、早朝から深夜に及ぶことが多く、私はその他に在郷軍人会役員やら、近隣六か村を併合した青年学校の教官を仰せつかるなどしたため、日曜、祭日等も休むことが出来ず、家族の不満等もあったが、戦争に征っていると思って下さいといって切り抜けてきた。

農繁期や秋の収穫期に、勤労奉仕に訪れる学生達の受け入れも、私の役目である。教師に引率され約五十名位の下田南校の女生徒が、毎日、役場の前の広場に集まると、皇居、伊勢神宮の遥拝を行ない、君が代を斉唱し、あらかじめ受け入れの為、待機している出征兵士遺家族の家庭に、希望する人数を割り当てる。その後、引率教師と自転車に乗って派遣農家を巡り、

鎌や鍬の使い方を指導するのである。始めて使う鎌など、恐る恐る使っていたのが馴れるに従い、農家から感謝される様になるには時間がかからなかった。戦いに勝つために、一億一心という心構えが、学生を問わず、老若男女一人一人の胸に強く浸透していたのである。

又、私には、婦人会の竹槍訓練も一仕事であった。家庭の主婦で、日中は無理という事で殆んど夜間、神社の境内で行なった。すべて、この様な行事に出席しないと非国民と呼ばれたので、昼の疲れた身体に鞭打って出席するのである。青白い月光の下、男顔負けの気迫で一時間、滴たり落ちる汗を拭い、訓練の終った後で出された熱いお茶をすすりながら、戦局や戦地の話しをする。必らず日本は勝つ、と話しを結ぶのである。

にもかかわらず、戦局は次第に日本軍の不利に傾いていた。十八年二月には、ガダルカナル島を遂に敗退、四月、連合艦隊司令長官、山本五十六の戦死、五月には、アッツ島守備隊全滅の悲報が続く。常勝日本軍を信じている国民も、色を失っていた。

食糧事情は、ますます苦しくなってきた。

完全保有米農家の少ない我が村は、農家の七十%は配給を受けなければならなかった。それに加え、東京方面からの疎開者は、続々と増えていた。この頃の成人一人当たりの配給量は、二合三勺（約三二〇g）で、その三二〇gもすべて白米ではなく、白米に換算されたトウモロコシ粉や未利用資源といわれる甘藷蔓を粉砕したものである。トウモロコシ粉など団子や炊とんにすると、若い人でも歯が立たない固さであった。少しでも農業をやっている人は、配給量でも我慢できたが、疎開者達は、大事な衣類を次から次と食べ物と交換して、飢えを凌ぐ者もあった。この頃のエピソードを二、三、紹介したい。

私が、農業会の管理米倉庫で管理米の出荷を終り、床を掃除していると、それを見ていた、疎開して農業会に勤めている十八才位の女の子が、「そのゴミを私に下さい。」と言う。そのゴミの中に、床にこぼれ、地下足袋に踏みつけられた玄米の粒が、僅か混入していたのである。私は気がついて、そのゴミを綺麗に選別し、一握り位の米を新聞紙に包んで渡すと、嬉しそうに礼を言い、事務服のポケットに入れるのであった。

又、小学校長は、舎宅から学校までの約四キロの道程を、弁当のお粥が零れるといって、何時も弁当箱を水平に持って歩いて通われるので有名であった。育ち盛りの二人の子供に固い所を食べさせ、残りを奥さんとお粥にして我慢していると言って、我々を泣かせたものである。

もう一つ、役場の前の駐在所の巡査の事を、書かない訳にはいかない。巡査は五十才ぐらいであったが、ちょっと老けて見えた。本署からの配給の塵紙が近くのバス停に届いた。三キロ位の重さだったと思うが、それを肩に担ごうとして巡査はヨロヨロとよろめいたのである。丁度、通りがかった私が運んでやったが、「四、五日、固い物を食べていないから。」と苦笑していたが、これでは、強盗などつかまえるにはどうするのだろうと思っていたら、ある日、本署から、下賀茂温泉イコナホテルに、手配中の男が泊まっているらしいから急行せよと連絡があったが、支度に三十分間も費やし、帽子あご紐、細い足に巻脚袢という勇ましいスタイルだが、「ちょっと、役場の若い人を貸してくれ。」というので、私が自転車で同行したが、手配中の男らしい者は既に居なかったので、ヤレヤレといった巡査の表情が印象的であった。

私は、開墾可能な村有地を疎開者に解放する様、村長にお願いした。何しろ、道路の肩までトマト、南瓜を植え、空閑地があれば一坪でも、甘藷

馬鈴薯を作りなさいと命令出来る時代であったから、村長は、一も二も無く賛成してくれた。永久に耕作権を与えるという条件で、疎開者に話したところ、全員、喜んで実行する事になった。

しかし、実際に着手して見ると容易な事ではなく、竹の根、木の根を堀り起こし、岩を砕き、鍬や鶴はしなど初めて持ったという洋服屋や商店主などが、家族総動員で手に血まめを作り頑張るのだが、遅々として進まない。親類や農家なども暇を見ては応援し、漸く畑らしくなり、収穫の喜びを得るまでには、二年以上かかってしまった。黒土の中からコロコロと転がり出す、無数の可愛い馬鈴薯の玉を、疎開者と共に手に取った時、思わず目頭が熱くなったことを憶えている。

昭和十九年九月十日、私は、食糧増産功労者として、静岡県知事、今松治郎から表彰された。微力ではあったが、私の努力がいささかでも認めて貰えたという満足感と、この一枚の表彰状は、戦場で頂く金鵄勲章と変らないんだ、日本が危急存亡の時、銃を取って第一線に立てなかった自分を、自ら慰めたものであった。

昭和二十年二月十六日は、小春日和の好天気であった。この頃、成人者は一日14g必要とされていた食塩の配給が不足し、国民生活に重大な影響ありということで、私は、製塩の指導員になる為の実地講習会が、下田町に近接したタタドの浜で行われていた。塩田式、枝上架式等、浜辺いっぱいに繰り拡げられた講習会もクライマックスに達した、正后近くであった。

南方の上空に異様な爆音を聞き、それが無数の敵艦載機群であるということに、気がつくのに時間はかからなかった。最初、胡麻粒位に見えた敵機の群は、見る間に下田上空にくると、折柄の太陽を背にキラリと翼を翻えし、街を目がけて一斉に急降下してくる。豆粒位の敵機は、たちまち大鷲の様になって、両翼から機銃かロケット弾か、火を噴きながら無抵抗な街並に襲いかかる。地上に墜落かと思う瞬間、ヒラリと機首を回し、大きく旋回して、低空で沖合いの海上へと去り、再び空高く舞い上がり、執拗な攻撃を繰り返すのである。こうした無数の敵の艦載機が、幾回となく攻撃を繰り返す長い間、それに対抗する一発の砲声も、一機の日本軍機の姿も見えない。

私達が潜んでいる海岸の目の前を、低空で沖合いに去って行く敵機は、長い竿でもあれば叩き落とせるくらいであった。私は、下田の街に姉がいたので、夢中で峠の道を街に目がけて走った。途中、舗装道路に幾箇所も機銃弾がささり、盛り上がっている所があった。街は、機銃掃射での被害は大きかったが、爆弾を落とされなかったのが、せめてもの救いであった。唯、港内に停泊中の船舶が、手痛い損害を被ったとの事であったが、幸い姉達は、防空壕の中で震えていたので無事であった。

しかし、更に追い討ちをかける様に、六月十日、沿岸警備隊や、数門の高射砲がなまじ有ったので、B29の目標となり、小さな、そして平和だった漁師町下田に大型爆弾が落とされ、死傷者百名以上を出す壊滅的な損害を蒙ったのである。私は、この下田町の空襲に遭遇してから、抱き続けてきた必勝の信念が、音を立てて崩れていくのを覚えた。

八月十五日、終戦の詔勅を竹麻村農業会の茶の間で聞いた。覚悟していたこととはいえ、涙が出て止まらなかった。一瞬、南方の海で戦死した弟や、沖縄戦に行くといって生死不明のその下の弟の顔が、頭の中をよぎった。数十人に及ぶ、前途有望な村の青年達の戦死は一体何であったのか。

私は泣きながら、肌身離さず持っていた軍隊手帖を、農業会の庭で焼いた。